# 本実践・研究から見えてくること

研究協力者　吉澤　恭子　川辺　茜
（秋田大学教育文化学部　教育実践講座）

**教材としての民謡の魅力を引き出す専門家とのコラボレーション**

「民謡」を題材とした授業計画を立てる過程において、自身が民謡らしい声と表現で歌えるかどうか、子どもに歌唱指導ができるのかどうかと不安を感じる教員は多いだろう。その背景には、民謡が馴染みの薄い音楽ジャンルであることに加え、教員自身が民謡の実体験に乏しいという理由があげられる。提案授業の題材は「民ようお国めぐり～秋田の民よう」と設定され、教材には秋田を代表する民謡《ドンパン節》と《秋田音頭》が取り上げられた。その指導計画では、音楽科に限らず社会科や家庭科と関連しながら郷土の伝統や文化にふれたり、唄の歌詞から国語科との合科的指導を構想したりと、教員にとって民謡は、子どもの資質・能力を高める上で非常に多くの魅力があると感じさせてくれる教材である。音楽科の教材としての民謡の魅力を引き出し、発見や感動といった瞬間を子どもに与えてくれたのは、授業者と専門家（ゲストティーチャー）との優れた連携による。音・音楽を扱う実践場面では、生演奏に勝るものはない。民謡歌手とお囃子（締太鼓、三味線）奏者に眼差しを向ける子どもの姿、三味線奏者に寄り添い奏者の伴奏に合わせて民謡を歌う子どもの姿、真剣に奏者の助言等に耳を傾ける子どもの姿を目の当たりにし、生の音楽を体感する喜びに溢れた提案授業であったと思われる。

**声による表現づくり：子どもの創意工夫を共有し、どのように共通理解をはかるのか**

民謡（唄）の習得では、記譜は用いずに模倣から学ぶ。その力は、いわゆる耳コピー力である。子どもは聴覚を頼りに模倣の実践から入り、創意工夫を凝らし、試行錯誤しながら声を使って様々な表現づくりにチャレンジする。例えば《秋田音頭》の「かけ声（ハイ　キタカサッサ　コイサッサ　コイナー）」に着目すると、声の出し方とその表現（強弱、ニュアンス等）、抑揚（音の高低や動き方等）、言葉の音節やまとまりと関連するリズム感やテンポ感、言葉と言葉の間の取り方等に、手本はあってもルールはない。型にはまらない自由な表現を探求し、楽しく実践に取り組んでいる子どもの姿が印象的であった。仲間とともに歌を披露し、聴き合いながら、主体的・対話的に展開される学びの様子を目にすることができた。「民謡に親しみ、自分なりに民謡らしい歌い方を探って欲しい」という授業者の願いは、十分達成されたことと思われる。音楽を表現する言語コミュニケーションとして、子どもは「感受」を語る場面が多い。一瞬で消えてしまう音楽を聴き、子どもはその音楽の何をどのように知覚しているのだろうか。一例として「節回し」に焦点をあてると、旋律の回し方（抑揚のつけ方）をどう捉え、自身の理解につなげ、解釈したのかを具体的にはかりうる「共通のものさし」―例えば図形楽譜やグラフィック等―によって可視化することで、子どもの音楽への理解度や認識度を確かめることができるのではないだろうか。実践の達成感や成就感を超えて、子どもの知覚の実態をはかりうる手立てのあり方に期待したい。（吉澤）

**「体験」と「実践」の大切さ**

授業協議会の後半には、はじめての試みとして「民謡独特の発声と声楽的な発声を比較しながら体験するワークショップ」を行った。ゲストティーチャーを務めた藤原美幸氏（民謡）と、研究協力者の川辺茜（声楽）が実演モデルとなって、参加者にも両方の歌い方を試してもらうことで、音楽観や指導観を広げることを目的とした。

ワークショップの題材には、教科書にも掲載され、広く知られている《こきりこ節》を選択した。参加者と一緒に音とりをしたのち、声楽的な発声と民謡独特の発声での模唱に続いて、それぞれ真似をして歌ってもらった。民謡的な歌い方の模唱を聴く際には、節まわしに注目し、聴き取れた箇所は歌詞カードに印をつけてもらうよう工夫した。歌唱の実践後の意見交換では、声楽的な歌い方は音程やリズムが明瞭な頭声的な発声であり、民謡的な発声は楽譜にはない節まわしを伴い、お腹から頭を突き抜けるような地声的な迫力ある声、といった点が挙げられた。音源や模唱を聴くだけよりも、実際に歌ってみることで違いを実感でき、理解が深まっていく手ごたえが感じられた。

現在の学習指導要領において、「我が国や郷土の音楽」の学習の充実が図られているものの、題材の扱い方や授業の切り口に悩む先生も多いと聞く。まずは教員も我が国の音楽や郷土の音楽に触れ、体験・実践する機会を持つことが大切なのではないだろうか。それは郷土の音楽や芸能が豊富な秋田の良さを活かしていくことや、より良い授業づくりにもつながると考えられる。今回の提案授業やワークショップで行われたような、「声の出し方」や「節まわし」に注目した授業・学習モデルは、「民謡」を題材とする際のひとつの選択肢となるだろう。頭声発声的な歌唱に苦手意識を持つ児童でも取り組みやすく、節まわしは個性豊かなものであるため、不正解を生み出しにくいことも利点である。「民謡」を通して声の出し方や歌い方が多様であることを知り、それぞれのよさや美しさを味わいながら、児童自らが声の出し方や表現を探究する、豊かな学びが展開されていくことを期待している。（川辺）